

## ブリテイッシュは太めがお好み？——英国肥満考

中山和郎

町を歩き交う人々が身に纏う短めのTシャツとローライズジーンズの間からは、行き場をなくした贅肉が顔を覗かせている。英国ではおしゃれに敏感な若者、少年少女にもいまや見慣れた体「景」である。

OECDが行った調査(二〇〇四年)によると、肥満とされる値(一五歳以上でBMI(体重(kg)/身長(m)の二乗)が三〇以上)は、英国では二三%に上っている。OECD加盟三〇カ国の中では米国の三二%、メキシコの二四%に次いで三番目で、欧州では最も高い。肥満予備軍のオーバーウェイト率(BMI二五~三〇未満)を含めると、その割合は一気に六三%まで上がり、一位の米国の六六%に次ぐ数字となる(ちなみに日本の肥満率は三%、オーバーウェイト率を含めても二五%といずれも加盟国中最小)。欧州の平均肥満率(一三%)と比べるといかに英国が突出しているかがわかる。しかも、その数値はここ二〇年で三倍以上に膨れ、増加率は文句なしの一位である。オーバーウェイト率に限れば加盟国中トップで、今後、肥満率でも米国を追い越す可能性は十分にある。

なぜ欧州の中でも英国に限ってこれほど肥満率が高いのか。英国滞在時のフラットメイト(二三歳男性)を例に挙げると、彼

はごく標準的な体形であるが、野菜嫌いで好んで食べるのは肉類。夕食はパスタなどを作ることもあるが、ファーストフードや冷凍食品が多く、食後にはチョコなどの甘物。バブに行けばビール三杯は飲み干す。彼の食生活は決して例外ではないのだ。

その特徴として、まず野菜の摂取量が絶対的に少ない。肥沃な土壌を持たない英国は、芋を除くと野菜のほとんどを海外からの輸入に頼り、値段は安くはない。陳列される野菜の種類も豊富とはいえない。レストランでの料理も、付け出しの野菜は芋を除けばほんの僅かで、野菜を食べる機会が圧倒的に少ない。英国で唯一美味しさとされるイングリッシュ・ブレックファーストはバランスの取れた朝食だが、一般家庭ではシリアルにトーストが加わる程度である。

二つめは外食の普及による脂分および糖分の過剰摂取である。ロンドンのような大都会は別として、夜間営業している飲食店は、バブや高価なレストランを除けば、ピザなど一連のスナック類を扱う店と中華のテイクアウトぐらい。それも不思議なくらい似た店ばかりが並ぶ。芋中心の質素な食生活に加えて一七世紀の禁欲主義も影響してか、彼らは味に関して全くこだわりがない。外食する若者はそうした店で油漬でたっぷ

りのソース(といってもケチャップ、塩お酢しかない)がかかったジャンクフードを旨そうに頬張るのである。

そして更なる悪人がチェコレートとクリスプ(ポテトチップス)である。菓子の種類も乏しく、砂糖の量が半端でないチョコレートと油・塩分豊富なクリスプだけといつてもよい。彼らはそれらを食事代わりを食べたりもする。メーカーが展開する値引きは、ひとつ買うともうひとつが無料になる「Buy one, get one free」が主流。数人からクリスプを毎日食べずにはいられないという話を聞いたが、この販売戦略が中毒性を高め、肥満化を加速させている。加えて大量のビール消費がダメ押ししている。

前述のフラットメイトに英国お勧めの料理を聞くと、冷凍庫を開けて「このソーセージパイだ」と返ってきた。小学校では野菜嫌いを減らす給食改革が始まっているが、その道は決して平坦ではないだろう。

昨年七月、体重八〇キロの一七歳の女性が、スリムな女性陣を押し付け準ミスイングラントに選ばれた。美意識の変化かそれとも肥満化する国民を肯定する国策か。英国民の行く末を危惧せずにはいられない。

(なかやま かずお/アジア経済研究所 所研究企画部)